

天下の 開発の 風と の 険と

冬のチョウモス祭のピーク、とても聖なる期間。男たちが聖域で数十頭もの山羊を捧げる間、女たちは村で歌い踊る。カラシヤでは、歌や踊りが宗教儀礼や行事を盛り上げるために重要な役割を果たす。



カラシヤの冬の祭典「チョウモス」の9日目には、すべての女性は沐浴し髪を結って「浄めの儀礼」を受ける。女性はそれぞれクルミパン5枚を手にし、水を手にした儀礼執行の男性が、火の付いたネズの枝を女性の頭上で2、3回まわす。これも日本の神社のおはらいと似ている



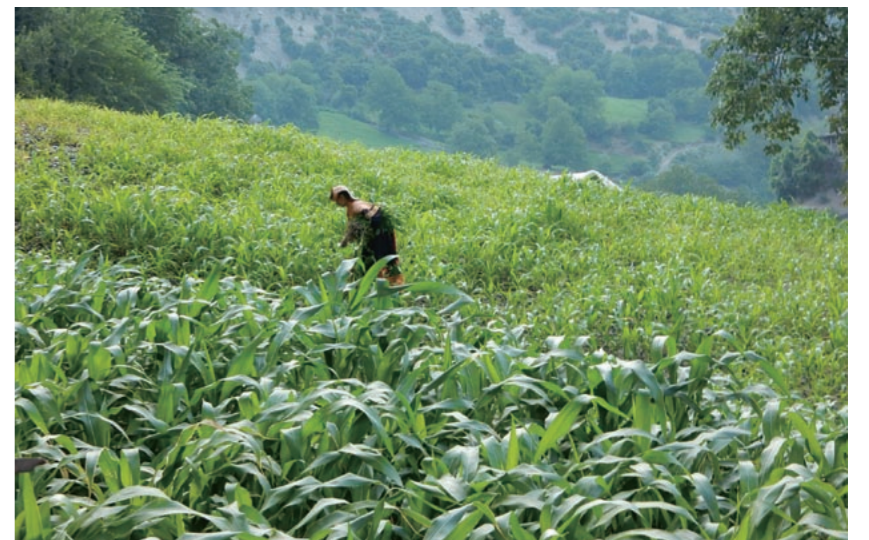
大祭「チョウモス」の6日目には、先祖の霊に秋に収穫した作物を捧げる、いわば日本のお盆に似た行事が行われる。神殿の前には「迎え提灯」ならぬ「迎え櫓」が作られ、各家からチーズ、パン、果物、灰で蒸したカボチャなどが持ち寄られる

はあまり持たず、それは周囲の人々から「貧乏」と同じ意味で捉えられていた。シンプルで原始的な生活ゆえに「汚い」とみなされ、イスラムが禁じている酒や踊りを積極的に謳歌するので、周囲のムスリムは眉をひそめていた。識字率も非常に低く、誇り高いカラシヤもいたけれど、多くは周囲の圧倒的多数のムスリムに対して劣等感を持っていたように感じた。

1970年代まで、カラシヤの女性たちは自家製の羊毛で織った布をざつくりと手縫いした黒い貫頭衣かんづかいを着ていた。80年代になると、毛織りの服は、寒い時期は別として、黒い布を手回しミシンで縫う貫頭衣に変わった。黒い貫頭衣を手織りの帯で締め、前1本、横2本、後2本、計5本の長いおさげの上に、子安貝、ビーズ、金属製の飾りをびっしり縫い付けた頭飾りを被り、首には何十束もの赤いネックレスがずっしりという女性の民族衣装は印象深い。当時も現在も、谷の外に住む人々にとっては、それがカラシヤの民族を象徴するようになっていた。



- a. ルンプール谷で一番古いグロム村から、バラングル村を見渡す。奥の山々の向こうはアフガニスタンだ
- b. カラシヤの生活基盤は半農半牧。女性は畑作業を受け持つ
- c. 主食は小麦とトウモロコシのパン。水で練りこねて平たく伸ばし、焼く。ナンやチャパティのように塩を入れないし、こねた後は寝かさない。焼き立ては香ばしくておいしい



生理・出産の期間に「隔離小屋」で過ごす女性には接してはならないとされている。出産祝いに親戚が持ってきた食事も、小屋専用の器に触れないように注意して移す



村を出た下流の水路で洗濯する女性たち。後ろに筆者が最初に支援を手掛けた「女性の共同沐浴場」がある



近年は行事や来客のときにソフトドリンクを出してもなすようになった

わだ 晶子 (わだ あきこ)

写真家&ライター。ルンブル福祉文化開発組合代表。1987年からカラーシャ族の谷に住む。地元の人たちとNGOを立ち上げ、日本政府の草の根援助を生かした水力発電プロジェクトで谷に電気を導入。日本の友人たちの援助で「キラン・ライブラリー／子供図書室」を運営。伝統織物を生かした実用的な小物クラフトの開発販売なども続けている。著書に『パキスタンへ嫁に行く』（三一書房）、写真集『Kalasha'-Their Life & Traditions』(Sang-e-Meel Publications) など。活動の様子は、ウェブサイト (<https://kalashapakistan.jimdo.com>) でも見ることができる。



てパシヤリという「隔離小屋」で過ごす必要はない。独自の文化や習慣を持つカラーシャだが、近年、さまざまな変化も見られる。警官や軍関係を中心に若者の雇用が進み、カラーシャの社会はここ数年間で急激に潤ってきた。それにつれて民族衣装も驚くほど派手になり、昔ながらのおさげ髪を結わず、頭飾りや首飾りを付けない娘も現れている。若い人たちは「スマホ」を持ち、フェイスブックを楽しむ。家屋は土の屋根からトタン屋根に変わり始め、村には商店も増えた。ただ、店の売物は大瓶のソフトドリンクやスナック菓子ばかりが目立ち、道端や河原はたちまちごみだらになっていく。カラーシャの間でも格差が広がっていて、経済的に潤った分がグローバリズムの負の面に注ぎ込まれているような気がしてならない。

その一方で、海外や国内のNGOによる援助プロジェクトも増えてきた。未完成のまま終わってしまう場合も多いのが残念だが、国からの女性現金支援金制度ができて、就学率も高くなり、町のカレッジに進む女学生や都会の大学で勉強する学生も珍しくなくなった。すべての人に恩恵が行き渡ってはいないとはいえ、人々の生き方は変わりつつある。



- d. 1988年の春祭りでは、女性全員が正装用の頭飾りを被っている。衣装も黒が基調で模様が少なかった
- e. 5月の春祭りで踊る娘たち。正装用の頭飾りは、近年は全員が持っているにもかかわらず、「重いから」と被らないことも増えてきた
- f. 昔ながらの非常にシンプルな織り機で、正装用の頭飾りの地布を織る。帯もこの機で織る

女性にはムスリムのように顔や体を覆い隠すパルダ制度がないし、男性とも自由に話をするので開放的だと思われるが、実は宗教的には「女性は不浄なので神に近づいてはならない」とされ、日常生活においてもさまざまな禁忌が課されている。

カラーシャには「ゼダウ／ホダイ」という天地創造の神が君臨し、その下に谷を守る10体ほどの神や女神が存在する。祭礼や祈願の際はいけにえにした山羊や牛の血をそれらの神に捧げて儀礼を行うが、それは男性のみで執行され、女性は神が降臨する場所には決して近寄れない。捧げられた後の肉も男性だけが分かち合って食べる。

それぞれの家にも家庭を守る神が存在するとされ、女性は家のみならず、村の中では顔や体、衣服を洗えない。髪結いも村外れの河原で行う。女性の生理・出産は不浄の最たるものとされ、その期間は村から出



カラーシャの女性の生活と切り離せないのは

バシャリ



バシャリの前で笑顔を見せる女性たち。右の少女たちがイスラム教徒風のスカーフを身に着けているのは、もともとのカラーシャ文化ではなく、周囲のイスラム教徒の影響だという

イスラム教徒が圧倒的多数を占めるパキスタンで、独自の信仰と文化を維持しているカラーシャ族。「昔はアフガニスタンにもカラーシャがいましたが今ではイスラム教に改宗し、古来の伝統は残っていません。カラー

シャならではの文化が残っているのは、博物館を除けば今はパキスタンだけなのです」と、かつてカラーシャの村を訪問した株式会社西遊旅行の澤田真理子社長は話す。同社は何度かカラーシャを訪問する観光ツアーを実施したことがあるが、外務省の渡航禁止区域に指定されたため、ここ数年は訪問できないでいるそうだ。

カラーシャの生活を取り巻く重要な概念が「清浄（聖浄）と不浄」だ。神や神への捧げものなどが清浄とされる一方、女性は不浄な存在とされ、特に生理や出産などの期間は、村の外にあるバシャリと呼ばれるおこもり小屋で過ごさなければならない。こういって、女性が悲惨な扱いを受けているように聞こえるかもしれないが、澤田さんが訪れた村のバシャリでは、女性たちは玄関ポーチでおしゃべりや編み物などをしながらこもりの期間が明けるのを待っていたという。「私たちの落し物を拾ってくれたバシャリの中の少女は、『私に触っちゃだめよ』と言って、手渡しせずに投げて返しました。それが習慣なんです」と澤田さんは振り返った。

不浄という扱いでこそあるが、カラーシャの女性たちは自由に家から出歩くことができ、学校では男女が席を並べて仲良く学んでいる。村を出て大学に進み、パイロットになった女性もいるというから面白いものだ。



村の小学校では、子どもたちが男女区別なく学んでいる

取材協力・写真提供：西遊旅行

地球ギャラリー

カラーシャの文化を知ろう!

冬を乗り切る栄養食といえば

ダウオック

V字型の渓谷にあるカラーシャの村では耕作地が少なく、主食のトウモロコシや小麦さえも自給できない家庭が多い。野菜はトマト以外はあまり作られない。そんなカラーシャの村では、赤豆が貴重なタンパク質源だ。トウモロコシ畑にまかれ、トウモロコシと一緒に育つ。土との相性のおかげか、カラーシャの豆は大きく実り、味が良く周囲のムスリムの人々からも評判が良い。

まきを絶やさぬ冬場に、豆をコトコト煮てクルミで味付けした温かいスープ風の豆煮「ダウオック」は、寒さを吹き飛ばすカラーシャのソウルフードとい

える。

元来、この地にはスパイスがあまりなく、すり潰したクルミは日本でいう味噌、醤油の役割を果たしている。

焼き立ての熱いトウモロコシ粉のタシリー(水でこねた平たいパン)と食べると、この上なくおいしい。

豆やクルミは子孫繁栄の象徴でもあり、カラーシャの行事や儀礼に多く使われる食材だ。行事のときに限らず、カラーシャの家ではいつも多めにスープを作る。ふらりと立ち寄る隣近所の人たちと、いつでも温かさを分け合えるようにするためだ。



子どもが通過儀礼を受ける数日前、親たちは畑で収穫した豆を煮て、谷の全家庭に配る

【RECIPE】

●材料(8人分)

乾燥インゲン豆500g／殻付きクルミ250g(クルミの実100g分)／コリアンダー、塩、トウガラシ適宜

●作り方

- ① 豆の汚れや石を取り除き洗った後、2リットルほどの水を入れて火にかける。
- ② すり鉢やフードプロセッサーなどを使い、殻を割ったクルミをコリアンダーの実、塩、トウガラシと共にすりつぶしておく。
- ③ 豆が柔らかくなった後、お玉の裏で豆を押しつぶす。
- ④ 最後に②を加え、しばらく煮立てて出来上がり。

取材協力・写真提供：わだ晶子